



TITLE:

# 自由民権運動と豪農層 - 美作自由 黨の成立 -

AUTHOR(S):

内藤, 正中

---

CITATION:

内藤, 正中. 自由民権運動と豪農層 - 美作自由黨の成立 -. 經濟論叢 1955,  
76(1): 480-500

ISSUE DATE:

1955-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/132430>

RIGHT:

# 經濟論叢

第七十六卷 第一號

---

防衛廳費の性格について……………島 恭 彦…(1)

自由民權運動と豪農層……………内 藤 正 中…(23)

英國稅務會計における減價償却の

生成確立過程 (Ⅱ) ……………高 寺 貞 男…(44)

---

[昭和三十年七月]

京都大學經濟學會

# 自由民權運動と豪農層

——美作自由黨の成立——

内 藤 正 中

は し が き

明治十一年共之社——十三年郷黨親睦會——十四年美作同盟會——十五年四月自由黨美作地方部——同八月美作自由黨。岡山縣津山地方を基盤に、明治前期をいづるこの一連の政治結社が推進する政治運動について、その展開過程および階級構成をあきらかにしようとするのが、本稿におけるわたしの課題である。

明治十三年、全國的なひろがりとな人民的なたかまりをもつにいたる自由民權運動を、「豪家の農商」の政治的進出をもつて、その特徴としてとらえるとき、豪農民權——作州民權運動を分析の對象とするわれわれの問題は、まず第一に、豪農民權登場の主體的・客觀的根據をもとめることになければならない。民權派豪農村落支配者たちは、世直し一揆・村方騒動に對立しつつも、かつてのときにおいては、尊擲——討幕の旗印のもと、尊擲派下士層と改革派同盟をむすぶことによつて、みずからの政治的進出をはかつたのであつた。だが、討幕の成果を、改革派同盟で指導權をとつた下級武士層にのみ獨占されるや、豪農層は獨自の要求と自己の主導とをもつて、「有司擅制」政

に對抗する自由民權運動を組織することになる。豪農村落支配者層を指導者とする民權運動の發展過程、すなわち十五年美作自由黨成立にいたるみちすが、いかなる手つずきをふんで、いかなる契機を媒介としてなされたか、ということである。

第二の問題は、共之社より美作自由黨にいたる民權結社の指導者となる豪農層と階層についてである。そのよつてたつ經濟的基盤のちがいは、民權派豪農層のなかで、政治運動推進のし方に相異を結果する。したがつて、地租輕減を主要な經濟的要求とした民權運動においては、その闘争の展開に應じて、民權派豪農層内部で主導權の變遷――下降がおこなわれねばならなかつたのである。豪農諸階層が、民權運動發展の各段階ではたす役割と限界とを、ハッキリとみきわめることはきわめて重要である。

美作自由黨成立にいたる作州民權運動展開過程の分析に、わたしは右の二つの問題をすえることによつて、自由民權運動において、指導者としての豪農層がはたす歴史的役割を、農民諸階層との關連のなかで追究してゆくはずである。

### 一自由民權運動の階級構成

問題の手がかりは、第一表からあたえられるであらう。

第一表を整理するとき、作州民權運動家の階級構成について、大略つぎの諸點が指摘されよう。

(一) 六十人の記載者のうち、士族出身者は三名にすぎない。民權運動家のはほとんどは明治二二年度十五圓以上――二〇〇圓――田畑約一五町歩以下の地租納入額をもつ農民層であつて、例外なく舊藩時代の村役人、明治以降の戸長・

副戸長という村落支配者層である。かくしてまずわれわれは、作州民権運動を豪農民権と規定することができるのであつた。

(二) だが豪農層といつても、ここでは大略三つのクラスに分けられるのである。一〇町歩以上の大豪農、一〇—三町前後の小豪農、一町以下の分解の過程にある中農層に近いものとの三階層である。大豪農は大庄屋→縣議、小豪農は庄屋→戸長という社會的地位をもつても特質づけられるが、民権運動との關連からいえば、前者は十一年共之社の構成員であり、後者は美作自由黨の主體勢力である、と概括できるものである。

(三) その出身地の地域性を考慮してみれば、美作でも比較的經濟的發展のすすんだ出雲街道沿いの地方、とくに城下町津山に近接して津山盆地農村の出身者が多い、ということができる。那別に分類すれば、津山から西へ——西々條郡十四人、西北條郡十二人、大庭郡五人、眞島郡四人。津山から東へ——東南條郡八人、東北條郡四人、勝南郡七人、勝北・英田・吉野各郡一人づつ。南へ——久米北條郡一人、久米南條郡三人。したがつて、久米南條郡羽出木村（現在の弓削町）庄屋の分家に生まれ、明治十四年二三歳の時までこの地に育つた片山潜が、その自叙傳に詳述している自然經濟濃厚な農村、貧苦な農民生活がいとなまれている地方は、片山潜自身が民権運動に何らの關心をも示していなかつたように、民権運動の基盤とはならなかつた。（片山潜『自傳』三—四九頁。）

作州民権運動の階級構成については、以上のような一般的规定をあたえることができるにしても、民権運動が、このような豪農層だけで推進されたものではなかつた以上、かれら豪農層の指導と統制下におかれていた農民大衆との關連をあきらかにしなければならぬ。さしあたつてここでは、民権運動展開の前提である幕末——明治初年の政治過程のなかに、豪農層がはたした役割、おかれた位置を考えてみることにする。

一揆處刑者二七、〇〇〇人をかぞえた明治六年徵兵令反對一揆の階級配置は、幕末—明治初年の作州農村における階級關係を、もつともよくあらわしている。

「近來御布令乍恐何事に不依心に不諱、就中徵兵・地券・學校・屠牛・散髪・織多の稱呼御廢止等の條件に至りては、實に不奉服、如何にも御損棄に相成、従前へ復し度と偏に心を苦しめ、其次第歎願可致と一應は思出候共、御許容には相成間敷、彼是時日を費さん事を恐れ、畏れ多くもむしろ強訴と何づけて徒黨を結び、暴動を起し、凶威を逞うし縣下へ迫らば、右の勢力をもつて壓倒し、前書の事件自然御取消に相成るべくと、兼てより窃に思惟致し候」(『首謀筆保卯太郎口供』——『明治初年農民騷擾錄』二四四頁)と、西々條郡貞永寺村總代、筆保卯太郎は、慶應二年改政一揆勝利の故智にならつて、大衆的示威——強訴を計畫した。筆保卯太郎の經濟的基礎を識る資料はないが、二二年度大野村(貞永寺は合併して大野村となる)地租十五圓以上納入者中、筆保姓の四人は、十五圓から二十圓を納めていることから(『岡山縣第六區衆議院議員之結果』津山市二宮立石家藏)、總代人筆保卯太郎がそのなかの一人であることは、ほぼ推定できる。とすれば、かれは、一町前後の中農層であつた、といえよう。慶應二年改正一揆の百姓惣代も、十石餘所持の行重村直吉であつたことも考え合わせて(富岡敬之・長光徳和「津山藩をゆるがした一夜」——『吉備地方史』六號六頁)、中農分解の過程で激發する世直し一揆の主體的指導層を、阻止された中農上層と規定できるのであつた。

註 同様な世直し一揆における中農層の役割は、岡山縣南部地方で天明期以降に激發する農民闘争の場合でも、檢證しうるのであつた(拙稿「幕政改革の社會的基盤」——堀江英一編『幕政改革の研究』所收)。

筆保卯太郎は、「圖らずも人心の不平に乘じ」強訴を企圖するにおよび、同村塚本儀四郎ら五人と計畫、みずから總代役の辭任願を出して、煽動していた。かくして「暴動の臭氣往々諸村へ傳染し議定書取綴堅く黨與を結び居候由」の状態にいたり、「諸村蜂起の萌し充分顯候」と判斷し、ついに蜂起を決行した。（筆保卯太郎「口供書」——『明治初年農民騷擾錄』三四四—三四六頁）。時をうつさず美作全州各地に農民は立ち、津山をさして進發する。蜂起につづく鬭争の過程では、縣廳への強訴、という計畫者の意向をはるかにこえて、打ちこわしをともなう世直し一揆へ轉化していつた。かれらの攻撃目標は、戸長副戸長五二軒、盜賊目付二六軒、地券掛役人七軒、新平民三三四軒をふくむ打ちこわし一五五軒、焼却二七七軒にむけられていたのであつた（矢吹正則「北條縣下暴動記」——『津山溫知會誌』十五篇一一二頁）。

百姓一揆の階級配置は、以上の記述からあきらかであるが、ここで問題にしなければならないのは、豪農層の動向である。すでにこの地方では、「元庄屋不正」に端を發した明治元年鶴田藩騷擾や（『明治初年農民騷擾錄』三三二頁）、「庄屋共役儀取放跡役村々の撰舉に任せ候事」と、村役人罷免・公選をかちとつた二年十一月の久米南條・勝南・英田諸郡での農民鬭争がたたかわれ（同上書三七頁）、古い村役人による村落支配は、あきらかに危機にひんしていた。豪農村落支配者層と村民大衆との間の對立は、階級分化の進行とともに一層激化してきた。新令施行↓出費増大にともなう大衆の不滿が一揆に發展するとき、農民大衆の鬭争目標が、法令實施擔當者である豪農層にむけられることは、あまりにも明白なことであつた。したがつて、豪農村落支配者層が危機を回避するみちは、大衆と同盟し、ともに立ち上ることが必要となつてくる。地券交付が「此頃の風説を聞くに、田地平均の御發令あるべしとて、富民は之を愛い、貧民は之を喜ぶ」（『岡山縣治記事』一卷一七六頁）と、あたらしい土地改革に二つの對立した路

線が擬せられているときには、とくにそうであつた。あるいはまた、「村の長をしている者が隨行せぬと群集は其村に來て暴行するといふので、副戸長なども皆出で行つた。そして、『私は何村の副戸長でござる。村の者一同残りなく出揃いました。皆々お早々とお出ましになりまして御苦勞様でござる』。と首領連のところを挨拶してまわつたものだ」(『久米郡誌』一七九頁)という、記述、そこでは打こわしを恐れた消極的なものであつたとはいへ、豪農村落支配者層が、一揆の同盟者になつてゐることを示している。さらに、一揆農民が中央指導部をおいた高野神社がある二官村の舊大庄屋立石岐、發生地貞永寺村副戸長で、總代役の辭表をあずかつていた櫻井孫左武郎をはじめ、津山盆地農村の戸長副戸長たちが被害をまぬかれてゐることなどによつても、かれら豪農層は一揆に同盟したか、少なくとも敵對者ではなかつたことはあきらかである。とすれば、農民闘争にあたつて、豪農層は二派に分裂してゐたことになる。一揆によつて襲撃された豪農層は、總じて寄生的側面をより濃厚にもつものであり、高利貸・酒屋・特權問屋を兼營するものであつたことが特徴的であり、これにたいして、一揆の側に加擔した一部豪農層および、一揆を積極的に説得しながら攻撃もされなかつた香々美村戸長中島衛・粃穂村醫師仁木永祐などは、養蠶―製糸業を中核とするブルジョアの發展を志向してゐる生産者の性格によつて特徴づけられるのであつた。事實第一表民権運動家名簿でもあきらかなように、民権運動指導者はほとんど打こわしをまぬかれており、他方でかれらは、作州での養蠶―製糸業の導入指導者たちでもあつた。

明治初年では、一揆に敵對するものと、積極的・消極的の別はあつても一揆に同盟するものとに、豪農層は分裂してゐたが、いずれにせよ、みずからの力で一揆を組織する立場にはいながつたのである。ところが、一揆に同盟



した豪農層のなかには、幕末の尊攘討幕運動の過程で活躍したものがいる。幕末においては、かれら豪農層は同様に、世直し一揆の危機に直面しながらも、みずから向けられた大衆の反封建的エネルギーを、尊攘討幕の統一目標のもとに、たくみに結集することによつて、豪農層の統制下におくことに一應は成功していた。尊攘派豪農層——二宮村大庄屋立石正介をキャップとして、香々美村大庄屋中島衛・知和村庄屋内田饒穂・貞永寺村庄屋櫻井頼直などは、尊攘思想鼓吹・農兵組織の過程をととして、農民大衆を自己の統制のもとに把握し、かつ、こうした大衆の革命的エネルギーをば廣汎な基盤として、尊攘派下級武士層の指導下に改革派同盟を結成し、討幕運動を推進していつたのであつた。この豪農層が、前述のように明治初年では大衆にたいする把握力を失つた理由は、何であつたか。

新政府成立とともに、かれらは相次いで中央政府に、あるいは地方藩縣に登用されていつた。ところが、討幕の成果は、農民大衆の利害に合致しないのみならず、相對立するものとして現われてきた。百姓一揆を踏臺にして、中央政治の舞臺に進出した豪農出身下級官僚は、年ならずしてふたび農民大衆に敵對する位置に立たされることになる。元年・二年と作州農村に繼起した農民闘争は、新政府に反對し、支配機構の末端にある庄屋層の罷免を要求するものとして激發した。他方では、豪農出身下級官僚自身も、新政府の開國和親政策に反對し、領主的反動——愛宕・外山攘夷事件に參畫するものであつた。だがここでは、出身農村に何らの基盤もなく、かつ百姓一揆に言及はしても、それを積極的に組織化して、みずからの反政府運動に利用することは、夢想だにしていなかったのである。したがつて、農村と絶縁し、百姓一揆と同盟しようともしない單純な領主的反動・素朴な攘夷主義を本質とする明治四年の攘夷事件は、あえなく挫折するのも當然ではあつた。（攘夷事件については、『服部之總著作集』第一卷五八頁以下、岡山縣の場合は八丹幸八『志士田淵敬二傳』および『立石家譜』による。

このように、維新政府への登用出任は、豪農層と大衆とのつながりをたち切り、兩者の對立をふかめるものとなつた。だが、このときにおこつた攘夷事件の挫折は、かれらに反省をあたえる契機となる。尊攘派豪農層の關心は、ここにおいて國內問題―地方産業の發展の上に注がれることになつた。禁錮一百日で許された立石岐をはじめとして、中島・内田はともに農村支配の第一線にたちかえる。疲弊困憊した作州農村振興が、かれらの新しい任務となつてゐた。前述徴兵令反對一揆が勃發したのは、このときであつた。

明治六年一揆では、たかだか同盟者にすぎなかつた豪農層が、十年代の自由民権運動においては、指導的立場につき、しかも幕末の尊攘運動で下士層に指導されたのとも異つて、豪農層自身獨力をもつて、運動を推進してゆくまでに、豪農層は主體的成長をとげる。その客觀的根據は、前述攘夷事件挫折・百姓一揆につづく地租改正事業のなかにあつた。地租改正は、豪農層の民権運動進出―農民大衆にたいする主導性獲得のために、きわめて重要な旋回基軸となるものであつた。

八年四月「久米北條郡の人民・改正の是非を論じ頗る物議あり、戸長及總代人等屢々説諭を加うると雖も、益々不平の色あり、外郡も同様苦情あり」（『北條縣史』二〇一頁）と、伝えられたが、明治政府―北條縣の命により、支配人民に説諭を加える戸長・副戸長・總代人として、地租改正をめぐるかぎり、人民大衆と何ら利害が對立するものではなかつた。上下から挾撃されるその立場も、けつきよくは、大衆の側に立たせることになり、戸長・總代人が先頭になつて地租改正をたたかい、法令施行をサポート・ジュするにいたる。さきの徴兵令反對一揆の首謀者が、地券取調事務を放棄した村總代人であつたことはすでに記した。したがつて、「備中賀陽郡數ヶ村の農民が、恐れ多く

も賢明官吏の説諭に服従せざりしか以て、區戸長數名を免職して人氣稍く威服するを得たり」(岡山縣通信)——『郵便報知』明治九年四月二八日號)という區戸長の免職も發生すれば、縣令以下岡山縣廳全職員の罷免事件すらおこなねばならなかつた(八年十月七日『岡山縣治記事』三卷五四六頁)。にもかかわらず、新しく着任してきた薩摩縣令高崎五六は、全人民階級のはげしい反對をもおしきつて、地租改正を強行完成させるのであつた。かくして、地租改正を契機に、「有司擅制」政府—岡山縣令高崎五六に對抗する全人民的統一戦線が、區戸長—豪農層の指導のもとに形成されてゆく。いまや豪農層は、みずからの指導と統制のもとに、農民大衆を組織しようとし、それを足場に、政治運動に乗りだしてゆくことになつた。

## 二 自由民權運動の展開過程

ここでの問題は、政府諸政策に對抗する民權運動の各發展段階においての、豪農層と農民諸階層の動向にある。

### (1) 共之社の成立—豪農民權の萌芽

明治以降、作州地方に導入された養蠶業は、「明治初年北條縣は勸業掛を設けて大いに蠶業を奨励し、民間においては、内田鑄穂・中島衛・立石岐・浮田卯左吉・安藤重恭ら率先して上州信州但馬地方より桑苗購入栽培を奨励せり」(『苦田郡誌』九三七頁)といわれるように、内田・中島・立石らの、すでに尊攘運動—徴兵令反對—揆の分析の過程で、われわれになじみのある豪農層が盡力するところであつた。かれらが養蠶業を中核とする地方産業發展に注目するにいたる契機を、わたしは、四年の攘夷事件の挫折—六年の徴兵令反對—揆のなかにもめてきた。内

田饒穂は、明治五年以來七年まで、信州鹽尻村藤本繩葛について、養蠶業の本場の本家仕込の實地修業をつんで歸國した（『岡山縣蠶業沿革史』四六頁）。一撥で打こわされた打穴村副戸長菅英治は、七年以來十一年まで上京し、農學研究に従事してきた（『久米邪誌』一〇二三頁）。また湯郷稻穂村西村總雄は、五年十月北條縣に勸業掛がおかれるや、その養蠶世話方にえらばれるのであつた（『岡山縣蠶業沿革史』四八頁）。このように、地方産業發展に努力した豪農層は、その農業經營においても、奉公人・日雇を雇傭して手作をしている生産者の性格をもつ在村の豪農層として把握できるのであつた。たとえば明治六年度の立石岐の農業經營はつぎの内容をもつていた――

手作 一二六俵半（約二町歩）  
 小作米 四四九俵半・金納二二俵五升六合（約七町歩）  
 奉公人（二人） 山重郎――給金十五圓但し五回に分割、孫四郎――給金一貫百目  
 下女婢（二人） 靜――一貫二百目、とみ――六百目  
 日雇 虎吉――一・五人役、治三郎――七人役、伊介――八十人役

（『明治六年賣の館』津山市二宮立石家文書）

地主的土地所有の上に立ちながらも、なおみずからは生産過程を擔當し、雇傭労働力を使用しつつ、生産力の發展を志向する豪農層にあつては、國家的封建的土地所有に、かつての封建貢租をうけついで金納地租にたいして、少なからぬ制約と不滿をもつものであつた。かれらの發展的意慾は、かくて十一年四月十五日結成の共之社の組織に發展した。

# 共之社盟約書

維新爾來文運日に開闢、苟も愛國の志操あるものは協賛蓋簪、或は結會以て國家の資益を興す美譽陸續たり、是に於て吾儕有志協心結社事理を討論し、疑義を控問、衆議を以て社會の鴻益を謀らんと欲し、社則を設け盟約をなす、如斯。

（津山市二宮立石家文書）

「國家の資益を興」し、「社會の鴻益を謀らんと欲」した共之社員は、第一表名簿でみられるように、作州きつての名門であり、大庄屋中庄屋をつとめ、十三年から十五年の縣會へは、二人のなから七人の議員をだしているような大庄屋―大豪農層を主要な構成員としていた。共之社員内田・中島・立石・菅・西村などが、六年以降養蠶業導入・栽培奨励に盡力したものであることは前述したが、共之社設立と同時に、盟約實踐のため、十一年二宮村に、立石を所長として、中島・内田・安黒・植月らを協力者とする「私立養蠶傳習所」を設置し、さらに積極的な産業指導にあたるのであつた（岡山縣蠶業沿革史』一〇六頁）。

共之社員の私立養蠶傳習所は、落閑縣令の殖産興業政策の一貫として津山におかれた縣立農事試驗場に對立して設立されたのであつた。だが、かれらにおいて「愛國の志操あるもの」の當然の任務とされたものは、決して地租輕減の政治的解決ではなく、おくれた作州農村への新しい産業―養蠶製糸業の導入發展にあつた。かれらが意圖したのは、生産力の發展・進歩のうちにこそ「國家の資益を興し」「社會の鴻益を謀る」鍵を見出そうとしたものであり、そのかぎりでは、生産―階級關係の變革は、全く考慮の外にあつたものといえるのである。したがつて、民權運動の發展過程では、みずからの階級的 성격が明確化するにしたがい、共之社員の多くは、脱落してゆかねばならなかつた。事實、二人のうち、十五年自由黨にのこつたものは、わずか六人にすぎない。

## (二) 國會開設請願運動―豪農主導の確立

「此頂米價地價の騰貴と公債證書の賣買にて金融に影響を及ぼし少しく景氣よし、唯高利貸者下のみ心算大いに齟齬するの色あり」とは、十二年二月の「作州津山近況」であるが（『山陽新報』十二年二月二十七日號）『山陽新聞七十

五年史』二五頁）、それは米價・地價の騰貴をテコに、豪農層の發展するさまをうかがわせるに足る。金納地租は、米價騰貴とともに土地所有者、とりわけ地主層には有利に作用し、その結果うまれた生活の餘裕は、地主・豪農層に政治運動進出の氣風を育成することになった。あたかも、町村會につづく縣會設置要求が、十一年三月十一日、岡山縣下町村會各議長から、地方官會議での決定を準據とし、「當縣町村會假規則を推して其權限を廣め堂々たる公撰縣會となし給はば」と、「公撰縣會起立の願望」が縣令に提出されたときである（『評論文集』卷二）。さらに同年七月の地方三法（郡區町村編成法・府縣會規則・地方稅規則）・十二年の縣議會設立は、豪農層の政治意識を喚起するものとしてはたらいた。かくして十二年二月の第一回縣議會には、共之社員のなから、立石岐・安黒基・直原又十郎・菅英治の四人の大庄屋出身豪農が選出されることになったのである。

選出された民権派縣議の仕事は、國會開設諸願運動の組織化であつた。十二年三月大阪の愛國社第二回大會につづき、岡山では六月三日、國會開設諸願準備會「兩備作三國親睦會」が設立された。當初は、西穀一ら士族出身インテリが牛耳をとつていたが、十二月の上京諸願のときでは「同志中平民は少くとも八分以上に居り、士族は多くとも二分以下の少數なれば、無論に士族は省き去り、純然たる平民より其委員を推撰」し、「之が先導を爲す者概ね皆其地の紳士にして、而かも亦多少の土地・財産を有する者に非ざるはなし」（『近時評論』二四三號）といわれているように、ここでは士族民権が、平民民権進出にとつて代られた。兩備作三國親睦會幹事には、立石・菅の二人が、上京委員には井手毛三が作州代表として選ばれているが、（『岡山縣勞働運動史資料』上卷二九頁）、いずれも「其地の紳士」であり、かつ「多少の土地・財産を有する」豪農であつた（前掲第一表参照）。共之社に結集した大豪農の一部は、かくして縣會設立・國會開設諸願をとおして、豪農主導の作州民権運動を推進してゆくことになった。

とりわけ國會開設請願運動が、「岡山縣兩備作三國三十一郡、一區一千一百七十一個村、一百六箇町」の全人民的な廣汎な基盤をもつていたことを、民權運動における士族にかわつた「豪家の農商」の主導性確立とともに、ここでは注目しなければならない（詳細は別稿「國會開設請願運動の階級構成」ではたす豫定である）。

### (三) 郷黨親睦會・美作同盟會―豪農民權の展開

明治十三年は、岡山縣建白に端を發した國會開設請願運動が、「豪家の農商」指導のもとに全國的なひろがりとな人民的なたかまりとをもつて發展したときであつた。國會開設請願に結集された大衆的示威の力は、民權派豪農層に、あらためてその威力を認識させ、かつ大衆の組織化に留意させることになつた。十三年の岡山縣下大水害は、ここでは積極的な意味合をもつてくる。「地方自治」「民力休養」を呼號する民權派豪農層は、直ちに災害に打たれた農民大衆に働きかけていつた。

中島衛を會長に、立石岐らも參加してつくられた十三年の「郷黨親睦會」がそれである。郷黨親睦會は、西々條・西北條・東南條の三郡にわたり、二〇五人の大衆を共濟制度による相互扶助組織によつて統制把握したものであつた（明治十三年郷黨親睦會員名簿「津山市二宮立石家文書」）。もちろんこれをもつて、かれらが直ちに政治運動に進出したものではない。しかしながら、「郷黨親睦會永代共濟規則」（津山市二宮立石家文書）第一條には、「永代共濟法は郷黨親睦會中に設くるものにして、該會員艱難相救ひ緩急相助くるの至情に出て、専ら本會を維持し以て親睦の交誼をして永遠に保全する爲之を設くるものとす」といい、第十條では「漸次資金の増殖するに隨ひ、會員外たりとも郷黨中無告の窮民は及ぶだけ恤救するを義務となす」と規定し、豪農民權は意識的に廣汎な大衆的基盤

の上に立とうと試みる。

したがつてまた、十三年にはじまる地方税制改悪を契機とする區町村民の負擔増大と窮乏化の進行は、民權派豪農出身縣議を、激烈な縣會鬭争にたちあがらせることになつた。元來政府がいう「地方」とは、「府縣」を指しており、民權派豪農が地盤とする「區町村」ではなかつた。だから、政府の地方自治・地方財政の諸政策は、すべて區町村の犠牲において遂行されねばならなかつたのである。十一年施行の地租割・戸數割の府縣移譲は、町村財政窮乏を結果する。十一年七月の「郡區町村編成法」では、制度的には町村を自治團體と規定したが、何らの財源をあたえないのみならず、町村財源を府縣に奪いさえした。かくて國稅・地方稅にあえぐ町村人民は、さらに新しく區町村協議費を負擔することになつた。このときにおいて、十三年の地方稅・教育令改悪は、土木費・教育費を府縣から區町村へ轉嫁し、一層課稅負擔を増大したのである。重稅に苦しむ人民大衆は、協議費負擔をめぐつて區町村長とはげしく對立抗爭する。區町村人大衆の下からのつき上げは、區町村長を、さらには縣議をして、「民力休養」をスローガンに、縣會における「地方自治」鬭争を激化させてゆくのであつた。〔岡山縣會史』第一編六三二—六四〇頁〕。

民權運動の發展——國會開設請願・縣會鬭争激化は、府縣會廢止案をはじめとして、十三年集會條例・十四年憲兵制度創設・農商務省設置、および十三年の地價五年間据置などの政府側對策の發令となる。そしてこれら諸政策は、十三年國會開設請願運動に結集した全人民的統一戰線の内部分裂を結果することになつた。まず、殖産興業政策の波に乗つて、生産力發展だけを志向して「共之社」に結集した大豪農層の大部分は、十三年を期に脱落してゆく。「鄉黨親睦會」の相互扶助的大衆組織にしても、地主的側面をより濃厚にもつ大豪農層にあつては、利害の對立するものであつた。したがつてそれは、指導する豪農層の上昇とともに解體をよぎなくされる。また縣會鬭争の激化は、



十三年を期とする經濟過程の變化にも相應じて、大庄屋＝大豪農層出身縣議から小豪農へと交代することになる。立石岐（二二年地租納入額二七六圓）は中島衛（八〇圓）に、安黒基（六六七圓）は内田饒穂（三〇圓）に、直原又十郎（不明）は森謙吉（不明）へと、それぞれ縣議を辭任交代した。このように、十三―十四年を劃期に、作州民權運動内部では、あきらかに主導權の下降（大豪農→小豪農）がみられるのであつた。大豪農層の脫落退嬰化の要因は、十三年の地價改正延期を有力な契機としていたが、この點については後述するはずである。

かくして作州民權運動は、小農層への主導移行のなかで、十四年二月「美作同盟會」へ發展してゆく。かつて國會開設諸願運動に、縣下民權運動の主導をとつた南部出身民權運動家は、すでに脫落し「最初は死すとも止まずとか、生きて還らずと云いし程の人ありしにもかかわらず、近來に至りては、更に盡力する者なきよしなるか」（明治十四年九月二五日發行『美作雜誌』第四號と、冷笑されねばならない時期であつた。このときにあつて、ひとり民權自由の旗をかかげる「美作同盟會」は、小豪農中島衛（八〇圓）・加藤平四郎（十六圓）によつて指導されていた。かれらは綱領に、「一致協同」を力説する。

#### 同盟主義

- 一 吾人一致協同して國權を伸張し、帝室を輔翼すべし
- 一 吾人一致協同して自由を進取し幸福を全うすべし
- 一 吾人一致協同して節約を固守し富強を圖るべし

（『美作同盟會規則』——津山市二宮立石家文書）

同盟主義の實踐・民權運動の組織化は、演説・美作親睦會開催・機關紙『美作雜誌』（十四年八月の第二號より、十五年四月の十八號まで現存、津山市南新座矢吹氏藏・津山郷土館保管）の發行をつうじておこなわれた。とくに、美作六郡

共立津山中學校設置にあつては、天下りの「設置連合會組織」の改正を要求し、中島衛の出身地香々美村では、村民大衆を組織して、「不正確なる連合會の評決に對し遵守すべきの義無之」「真正なる共立となし永遠の維持法を設け」るべくと、戸長役場・郡長にたいし請願闘争を展開した(『美作雜誌』八號)。さらに、連合會改正不許可となるや、「不條理の事なれば費用徴収に應ぜざる勢なり」と報じ、大衆に「地方自治」「防衛闘争を煽動するのであつた(同上誌九號)。また、縣の官民區分にまつわる不正として、民有溜池の官有化を採り上げ、「吾人權利の消長にも關係するもの亦少なからず」として、強力にこの運動をバックアップする(同上誌十號)。

このように町村人民と利害をともし、大衆的基盤をもつ「美作同盟會」の民權派豪農層は、「我縣下の議員若しくは常置委員となれば、反て官吏を氣取り民權杯は棚に上げ」(同上誌四號)と、上昇轉化しおえたかつての民權運動指導者を、批判しうる自信と榮譽とをもつものであつた。したがつて、『美作雜誌』上での縣令高崎五六攻撃はきわめて鋭く、かつ活潑であり、毎號のように「民力休養」を楯に、徹底的な批判を展開し、自由民權をたたかいとらうとした。(『我岡山縣會は無用の贅物と云うべき乎』二號・三號、「地方官の職務を論ず」三號・四號、「國會開設の準備は地方制度の改良に在り」十一號)。

#### (四) 美作自由黨の成立——豪農民權の解體

このときにあつて、十月十二日の國會開設を約束する大詔渙發は、民權運動にたいする一大痛撃であつた。うけて立つ美作同盟會は、「陛下公議輿論の傾向を察せられ、天下人民の希望を容れさせ給い」と理解し、十年の期間をもつて「専ら在廷の君子が憲法制定の爲に要せらるる所の時日」と解釋した(勸諭を讀む)——『美作雜誌』七號)。

しかして、「國會開設の準備に着手するを今日の急務」とし、「官威を以て人民を抑壓し、人民は官吏を視る恰も蛇蝎の如く互に相疾し氷炭相容れざる狀況」を正すため、「府知事縣令及び郡區長を公撰に附すること」「府縣會規則を改正すること」を要求し、もつて「官民和合の實」をあげようとするのであつた（「國會開設の準備は地方制度の改良に在り」——『美作雜誌』八號）。まことに、井上毅の岩倉への上書のように、「此勅諭は縱令急進黨を鎮壓する能わずとも優に中立黨を順服すべし」の效を奏する。「苟も思君愛國の人士は剛毅にして粗暴に流れず」（『輿論』——同上誌三號）と、自負する美作同盟會員は、改良主義者よろしく、ここに「順服」させられた。

かくて美作同盟會は、その改良主義的色彩を一層濃厚にしつつ、十五年五月の「自由黨美作地方本部」・八月の「美作自由黨」へと發展する。五一人の黨員については、すでに第一表で圖示し概括したとおりである。『美作雜誌』の終刊號は、とくに華士族だけが政權をとり、平民が除外されている現狀を批判し、「政權の平等」＝ブルジョアの平等を主張することによつて、豪農層の政治的進出を露骨に要求した（「人民宜く平等の政權を得べし」——同上誌十八號）。かかる要求實現のための全國的單一有產者政黨——「自由黨」、その美作部の結成である。

……苟も世の志士仁人を以て自ら任ずる者は袖手傍觀、唯徒に太平無事を歌うの秋ならんや、宜しく道理を探究し進んで智見を擴充し邪を驅き愚を導き、戮力奮勵天與の自由を伸張し、萬人の幸福を増進し以て社會の改良を計畫するは、是れ當さに吾人の盡すべき所の義務責任なり、……吾黨は是より益進に舊來の陋習を蟬脱して本然を究うし、自由權利を伸張して國家の元氣を作興し、以て皇室を富強の安きに置き、萬人の幸福快樂を鞏固安全ならしめんと欲す、是則吾黨が今茲に美作自由黨を組織し以て社會を改良し、國家の福利を増進せんと欲するの所以なり、……」（自由黨美作地方本部規約）津山市二宮立石家文書。

「世の志士仁人を以て自ら任ずる」民權派豪農層が、自由權利の伸強をめざす公で黨あるにせよ、それが「政

治に關する事項を講談論議するために結社したるものに非ず」(『規則』第十八條)と、現定してみずからをしぼるとき(たとえ、集會條例紙觸をさけたものであるとはいへ)、人民大衆は、自由黨の本質を見きわめ、すでにその指導下に同盟することを欲していなかつた。結黨直前の四月二三日に開かれた第三回美作親睦會は、「來會者第一回の半分以上」(『美作雜誌』十八號)というありさまで、豪農主導の美作自由黨は、すでに大衆的基盤を失いつつあつた。その盟約がかかげる「善美なる立憲政體」は、もちろん大衆が希求しているところではない。美作自由黨が大衆の要求を無視し、大衆的基盤を失うとき、それは豪農民権の解體のみを意味していた。

### 三 總 括

——經濟的基盤を背景にして——

世直し一揆の攻撃に直面した豪農層は、改革派同盟―討幕―新政府出仕―下野―攘夷事件と、維新期の政治過程にめまぐるしい動向を示すが、地租改正を旋回基軸に、とにかく村落支配者としての自己の位置を再び確立することができるのであつた。かれらが、未だ生産過程にみずから従事し、農業生産力發展に多くの關心をもつかぎり、農民大衆との利害の同一性はもちえたのである。地租改正の遂行過程は、いろいろな意味で豪農層の村落支配・大衆把握を強固にした。他方またかれらは、養蠶製糸業の導入發展をつうじて地方産業興隆に努力してきたが、そこでの發展的意慾は、豪農層の民権運動進出の契機となるものであつた。

かくして十一年「共之社」より豪農民権は展開していつたが、そこでの特質は、十三年を劃期とする指導者層の交代である。十三年の大豪農から小豪農への主導権移行は、豪農民権が廣く大衆的基盤に立つたときであつた。で

は何故ここで大豪農は脱落・退嬰化しなければならなかったのでしょうか。

第二表 立石家の農業経営の變遷

	手 作 米	小 作 米	計	資 料
明治六年	一二六・五 <sup>俵</sup>	四七〇 <sup>俵</sup>	五九六・五 <sup>俵</sup>	寶の館
明治十四年	六一・〇	八五三	九一四・〇	田畑宛米帳
明治十五年	?	三〇四	?	家政要録
明治十九年	六五・五	六九九	七六四・五	小作宛米受取算用帳
明治二十年	三五・五	六八九	七二四・五	小作米取立庭帳

備考 資料はいずれも津山市二宮立石家文書による。

六年—十四年での手作規模半減・小作米二倍増大がまず目にとまる。十五年以降小作米が増加していないのは、共之社による「私立養蠶傳習所」の發展として、立石岐を中心に民権派大豪農によつて十四年「二宮座繰製米場」が設置され、かつ十六年以降赤字経営をしていたことにもとづく（明治十六年六月製糸中諸控「津山市二宮立石家文書」）。ところで十四年度にかんしては、十年以降の米價高騰・それが現物小作料收得の地主には有利にはたらいいたこと、したがつて小作料中地主取分が最高となる時點であつたこと（下山三郎「明治十年代の土地所有關係をめぐつて」——『歴史學研究』一七六號五頁）、さらに十三年の地價改正延期、岡山縣下の大水害にもとづく土地集積などの諸要因を考慮しなければならない。このなかで、大豪農は次第に寄生地主化していつた。立石家また同様である。かくて政治過程では、共之社員大豪農出身縣議が小豪農に交代し、南部民権派豪農が脱落して『美作雜誌』で冷笑されるのであ

つた。倉敷地方では、すでに十二年小作爭議に對抗する「地主同盟」が結成され、地主層は階級として形成されてゆく(拙稿「備中酒津梶谷家の小作問題」——農政調査會編『小作運動に關する史料集』所收一〇六六頁)。

上昇轉化しゆく大豪農からバトンをうけた小豪農は、國會開設請願運動以來のたかまりをついで、「鄉黨親睦會」——「美作同盟會」の組織活動をつうじて大衆的基盤にたつことになる。だが、地方稅改惡を契機とする重稅賦課と養蠶不振とは、農民層の階級分化を激化し、脱農民化してゆく没落農民は、そのまま地主のもとに小作人としてくみいれられてゆくのであつた。

第三表 地租十圓以上納入者の變化

	明治十五年	明治十七年	明治十九年	明治二十年	明治二十五年
西四條郡	一三三〇人	一二六六人	一二三七人	一〇六八人	九二二人
西北條郡	七四九	六〇二	六六二	五五一	五一一
東南條郡	五六〇	五〇二	四四四	四二五	三九〇
東北條郡	四八九	八七六	九六七	七六九	七一一

備考 『岡山縣會史』第一編五二—五五頁より作成。

第三表では、地租十圓——約七反歩前後を所持する中農層の没落化が顯著に反映されているが、かれらは直ちに小作人として地主制のもとに組入れられ、また一部のもは製鐵労働者・日雇人として村外へ出ていつた。かくして二二年には、土居通信・豊福俊雄・金田傳一郎の三名の大地主がこの地方に生まれ(各一三〇町歩所有『岡山縣貴族多額納稅者議員互選人名簿』)、かれらを中心にする地主的支配が、以後の作州地方政治經濟を統轄する。土居・豊福

は、ともに六年一揆で徹底的な打ち合いを被つたのであつたが、二〇年以降では逆にこれらの大地主層の支配體制が、農民大衆の反封建的エネルギーをおしつぶして確立されたことに、作州民權運動挫折の原因がある。

豪農民權のあつけない解體は、民權運動指導者のす早い轉進にもあつた。「一朝大に感ずる所ありて、斷然事を擲ち家務を親戚某に托し舊里船穂村に隠れ、専ら思いを風月に寄せしが、十七年に至り司法省の命に應じ判事補に任ぜられ、岡山の始審裁判所詰となり、又轉じて勘解吏となる」(「立石君傳」——攝提子編『帝國議會議員候補者列傳』八明治二三年ノ)の立石岐だけではない。菅英治は縣屬内務部長心得に、植月澄江は郡長となる。中島衛は十八年に死亡するが、加藤平四郎は國會議員から二七年靜岡縣知事に榮進し、井手毛三また縣會副議長より國會へすすむ。豪農民權指導者層のこのような上昇轉化の方向は、かれらが土地所有者としてもつプチブル的性格が、當然の歸結として予定していたものであつた。ともあれ、豪農民權の歴史的役割と限界とは、寄生地主制確立の問題として把握しなければならぬが、いずれ稿を改めて、經濟構造のよりふかい分析から究明したいと思つてゐる。

〔附記〕資料採訪にあつては、津山市二宮の立石懸さん、郷土館の方々や津山市役所の橋本勝之助氏らの御援助をいただいた。また作陽高校の大林秀彌氏には、とりわけ多くの好意ある便宜を計つていただいた。附記して謝意を表します。